

## スルタン

四月に入るとサウジアラビアはいよいよ灼熱の国と化した。

ギラギラとした陽射しが容赦なく地上の全てのものを照らす。周囲の白壁、地面からの照り返しが眩しい。熱さが好きで、熱さに強い慎太郎は、時折、その光に包まれ腕をまくったりする。すると、ものの数分で光線を浴びた腕がひりひりとしてくる。

周りはきらきらとした光と白い色で一杯になる。熱さに耐えられなくなると、その心地良い灼熱(しゃくねつ)の大気を抱えながら、日陰に入って、熱くなった壁にゆっくりと持たれ風に吹かれる。

すると、沙漠の中を旅するベドウィンになったような気がしてくる。

白壁の前には、夾竹桃、ブーゲンビリアの花がその赤を鮮やかに際立たせながら、たくましく咲き誇っている。

四月には、思いも寄らない嬉しいことがあった。

慎太郎が会社に着いて間も無く、昨年一二月に石油省のロビーで会ったスルタンから慎太郎の携帯電話に電話がかかってきた。ロビーで会ってから四カ月ほど時間が経っていたし、これまで携帯電話に電話をしてくるアラブ人はいなかった。なので、慎太郎はスルタンと名乗られても、最初は誰のことだか分からなかったくらいだった。

話している内に、ロビーで会った貴公子のスルタンであるということが分かった。会った時に、名刺を渡したことも思い出したが、まさか、このような形で電話を貰えるとは夢にも思っていなかった。心が躍った。

スルタンは、いきなり、今夕、慎太郎のレジデンスを訪問したいと言った。会ってから随分時間が経っているのに、突然、レジデンスを訪問したいというスルタンの申し出には驚かされた。

幸い、慎太郎には、たまたま用事が入ってなかった。それ

に、レジデンスは安全なので、これもまたアラブ風なのかも知れないなどと納得して受け入れた。

サウジ人をレジデンスに迎えるのは初めてのことだった。また、スルタンは、高位の人物のように思えた。慎太郎の心は一段と弾んだ。そして、貴公子である彼は恐らく従者を連れて豪華な車でやって来るに違いないなどと想像して慎太郎の期待は高まっていった。

ところがその期待はあっさりと裏切られた。

何と、スルタンは、トヨタカローラを自分で運転して来たのだった。

それを見た慎太郎は、勝手に、自分がスルタンのことを貴公子と考えていただけで、実は、普通、いや普通以下のサウジ人だったのかと幾分気落ちがした。しかし、直ぐにそんな卑しい、都合の良いことばかり考えていた自分に気付き、サウジ人が積極的にアプローチをしてくれたことに感謝するよう気持ちを切り替えた。

不思議なことに、そんな慎太郎の気持ちとは裏腹に、レセプションのファハドは、威風堂々としたスルタンを前にして畏敬の眼差しで見つめていた。まるで、日本人が皇族を前にした時のように小さくなっていた。

どうしたのだろうかと思っただ。

ファハドは、スルタンに自分達の身分のものとは違う何かがあることを本能的に嗅ぎ取っていたのだ。

スルタンの周りには、石油省で会った時と同じ、芳しいバラのような高貴な香りが漂っていた。

スルタンはまた急に慎太郎を自分の家に連れて行きたいと誘った。

何事にも急が好きで治安状態を考えれば迷惑な誘いをする人だと思いつつも、慎太郎はサウジ人の家を訪れてみたいという気持ちもあって悩んだ。

慎太郎は前回の滞在の時には大使館勤務で日本人社会との付き合いが多く、あまりサウジ社会には馴染んでいなかった。

た。それだけに、一層、今度こそサウジ人の社会にとっぴりと浸かりたいという気持ちが強かったのだ。

治安がひどく悪いので慎太郎はこれまでのところ出来るだけレジデンスから表には出ないように心掛け、まるで籠の鳥のような生活を送っていただけだった。

彼に会ったのは石油省だったし、見かけも貴公子なので、慎太郎は、彼に問題はないだろうと思っていた。

しかし、一抹の不安はあった。

万一、彼がテロリストに関係があったらどうしようなどと考えていたのだ。沙漠のサソリには僅かな外国人もいるが、ほとんどがサウジ人だった。

ところが弾みと言うのは恐ろしいものだ。

それに、スルタンが前大臣秘書官のアブダラーとイメージがダブったこともあり、彼を信じなければいけないと考え、簡単に断ることが出来なかった。

結局、思い切ってスルタンのところに行ってみることにし

た。

慎太郎には慎重な反面、時にこのような向こう見ずとも思える思い切った行動をとるところもあった。

慎太郎は、スルタンをロビーで待たせ、前回赴任の時に作ったトープを着て行くことにした。

慎太郎のトープ姿を見て、スルタンは大層喜んだ。スルタンは、良く似合っていてシェイクのように見えるなどと慎太郎のことを誉めた。お世辞かもしれないが慎太郎は満更でもなかった。

レセプションのファハドも、慎太郎の姿を見て、目を見張って驚いていた。そして、満面に笑みを浮かべて喜んで握手を求めた。

ファハドも、良く似合っていて、まるでプリンスのようだななどとおだてていた。

その国の衣装を着るといふことは、どの国でも歓迎され喜ばれることだ。

二人を乗せたカローラはレジデンスを後にしてファハド大通りを南に向かって走り出した。

慎太郎は、リヤド南部は治安が悪いと聞いていたので、スルタンに従ったことを後悔し始めていた。しかし、今更、引き返して貰うわけにも行かない。慎太郎は、運を天に任せるより仕方がなかった。

スルタンの車の中は、オスマと違って音楽がかかっているようなことは無かった。音楽が好きで慎太郎は、ほんの話題の一つのつもりでスルタンに気楽に聞いてみた。

「貴方は、音楽を聴きませんか。サウジではレバノンの歌手なども流行っているようですが」

「レバノンの歌手。音楽。聴かないね。私は、そもそも音楽が好きではない。コーランが全てだ」

慎太郎は、ハイファ・ワハビ、ファイサリア・モールなどの現代的雰囲気から、一気に、敬虔なイスラムの世界に引き戻されたような気がした。スルタンのような人間がサウジの主流なのかも知れないと思った。

三〇分程走った後に、カローラは、左折をして住宅街へと入っていった。

そして、モスクの向かい側の薄暗闇で止まった。

「シンタロウ、悪いがちょっとここで待っていてくれるか。お祈りの開始時間に少し遅れたが、これから参加してくるか」

そういうとスルタンは、車の中に慎太郎を一人残したまま、モスクに入ってしまった。

そういえば、レジデンスを出てきたのがマグレブのお祈りが終わって少し時間が経っていたから、イッシャーのお祈りの時間になっていてもおかしくないし、走っているうちに遠くからアザーンが聞こえたような気もしていた。

それにしても、スルタンの身勝手には呆(あき)れた。失礼な人だと言っても始まらない。見知らぬところで、車の中に一人でいるのは、それだけでも緊張するのに、治安が良くないと思われる場所に一人で置き去りにされたのだから、慎太

郎の不安は高まった。

こんな時にテロリストが出て来たら一溜まりもない。

その場で射殺されてしまうこともあるだろうし、テロリストに捕まって慎太郎の解放を自衛隊のイラク撤退の引き換え条件にされてしまうことも考えられる。

慎太郎は、極度の緊張の中、脂汗を流しながらスルタンを待たざるを得なかった。

お祈りの時間はだいたい三〇分ほどで、既に始まっていたのだから、それほど時間がかからない筈だったが、慎太郎には随分長い時間のように感じられた。

暫くしてお祈りが終り、モスクから大勢の人が出てきた。

慎太郎は、一瞬、緊張したが、幸い、テロリストらしいものはいなかった。皆、車の中の慎太郎を見ると、親しげに言葉をかけて通り過ぎて行った。慎太郎は、自分がサウジの民族衣装であるトープを着ていたことを思い出した。慎太郎も

慌てて、アラビア語で挨拶をした。

「マーサ・ヌール」

「アレイコム・サラーム」

中には、トープを着てサウジ然としていた慎太郎がサウジ人ではないと気付いたものもいたようだった。

皆、数人でなにやら話をながら暗闇に消えていった。

スルタンはなかなか出てこなかった。

人通りが少なくなった頃、薄暗闇の中を一人の若いサウジ人が車に近づいてきた。

「アツサラーム・アレイコム。シントロウだね」

とその男は尋ねた。

「アレイコム・サラーム。そうです」

と慎太郎はどうしてこの男が自分の名前を知っているのかと訝しく思ったが、恐る恐る正直に応じた。

「スルタンから君を連れて来るようにと言われたから、迎えに来たんだ。僕の名前はファハドだ。宜しく」

まだ二十歳そこそこの若い青年は、そう言うと、笑顔で握手をしようとして手を差し出してきた。彼は中肉中背だったが、やはり育ちの良いサウジ人らしく色は白く、目鼻立ちのくつきりした顔をしていた。

「宜しく」

人を使いに出すなんてスルタンはどこまでも勝手な人だと思いながら、慎太郎も手を差し出し握手をした。その手は暖かく柔らかかった。

慎太郎は、ファハドに従って、モスクの庭に入っていった。メツカ、メディナの二大聖地には非イスラム教徒は決して入れない。モスクにも入れない筈なので、スルタンは庭でも待っているのかと思ったたら誰もいなかった。

戸惑っている慎太郎に対し、ファハドはモスクに入るよう促した。慎太郎が躊躇(ちゅうちょ)していると、中からスルトンの声がして、入口にスルタンがにこにこ顔で現れた。

そして、慎太郎の心配をよそに言った。

「慎太郎、シェイク・アリ・ムトラックが君に会いたいと言

っているから、中に入ってくれないか」

慎太郎は、意外な展開に驚いていた。

シェイクと言えば、族長もしくは宗教指導者ではないか、そんな偉い人と会えるのかと疑心暗鬼だったが、思い切って中に入った。

中には、恰幅の良い、いかにもリーダーらしいふくよかな顔をした老人が笑顔で待っていた。

近づくとアリは、いきなり慎太郎をまず左から続いて右から抱擁した。頬の近くでキスをする音も聞こえた。慎太郎は、くすぐったかったが、これがアラブの習慣であることは十分に承知していたので、慎太郎もそれに応じた。

初対面でイスラム教徒でもない慎太郎に対してそのような思い切った振る舞いの出来るアリの包容力に慎太郎は深い感銘を受けた。

「スルタンから君が日本から来たことを聞いて、関心を持ってね。突然で悪かったが、モスクの中で若者達と話をしたいと思ったんだ。お願い出来るかね」

慎太郎は、これでモスクに入れることになった理由が分かった。

若者達と何を話すのか分からなかったが、慎太郎にはモスクの中を覗(のぞ)けるといふ好奇心もあった。アリの申し出に応えようと心を決めてスルタンの方を見ると、スルタンは、慎太郎の受諾を予想していたかのように、笑顔で静かに頷(うなず)いてみせた。

また、慎太郎は、スルタンの車でここに来ているので、それ以外の選択はなかった。

モスクの中には見事なほど何も無かった。

仏教寺院、ヒンズー寺院と比べると実にあじけない。イスラムは偶像崇拜を嫌うことは分かっていたが、本当に何も無く、絨毯(じゅうたん)の敷かれた広間があるのみだった。強いて言えば、説教を行うイマーム(宗教指導者・導師)用の壇があり、その脇にメッカの方向を示す凹みがあるだけだった。広間には、二〇名程度の若者が半円を作り座っていた。ア

りはその中心に慎太郎を座らせると、慎太郎のことを紹介した。アリの紹介を受け、慎太郎が挨拶をすると、大学生あるいは大学院生もいるのか、皆、綺麗(きれい)な英語で次々と自己紹介をした。

彼等は、最初は日本のこと、サウジの印象などを聞いていたが、その内に、イスラムの話、そして国際政治の話などに発展していった。

慎太郎は、日本人の宗教感について聞かれたので、日本では、誰もどの宗教でも自由に選択出来ることになっているが、基本的に無宗教な人が多いと応えた。そして、昔は、日本人は基本的に神道であったと付け加えた。

慎太郎は、特定の宗教を信じているわけではなかったし、学者でもなかったから詳しくは説明出来なかったが、子供の頃から聞きかじっていた、山にも花にも木にも神が宿っているという八百万(やおよろず)の神の考え方を説明した。

しかし、彼等はアラール以外に神は無いと信じているので、全く理解出来ないようだった。

そして、慎太郎が最も驚かされたのは、彼等の多くが反米

であるということだった。誰一人として親米のものはいなかった。

慎太郎には、あれだけ英語を流暢(りゅうちょう)に喋るのにどうして反米なのだろうかと思議に思えた。米国に留学したのも相当に多い筈だし、この国と米国とは石油関係で親密な関係が構築されているではないか。

この若者達は偏見を持っているのではないかと慎太郎は考えたくらいだった。

そこで慎太郎は思い切って聞いてみた。

「この中に米国に留学したことがある人はいますか。いたら手を上げてみて下さい」

驚いたことに五人も手を上げた。

かなり多い。

さすがリヤドの若者達と感心したが、恐らくお祈りに来ている若者の中から選りすぐられた結果なのかもしれないと思われた。あるいは、日本から来ている慎太郎と話してみたいと、ここに残った若者は、そもそも高学歴で意識が高いのかもしれない。

続いてイギリスに留学経験のあるものを聞いたところ、二人が手を上げた。何と、欧米の留学経験者が三分の一を占めていることになる。

そのような若者が、唯一神アラーへの信仰を疑って止まないことにも改めて驚かされた。慎太郎はますますそのようなサウジ人に関心を深めていった。

「それで、どうして皆は米国が嫌いなのですか」

と慎太郎は率直に聞いてみた。慎太郎には、まだ、彼等の意見に納得が行かなかった。特に、ライフスタイルから音楽までアメリカ漬けに等しい日本で育ってきた慎太郎には理解することが難しかった。

米国留学経験のある若者が慎太郎の質問に応えた。

「米国の大学は最高水準にあると思いますから、留学先としては当然米国を選ぶことになります。サウジに戻った時にも評価は高いのです。彼等とは宗教の違いはありますが、啓典の民として相容れないことはありません。米国の人々は基本的に善良だと思えます。周囲の人達も、皆、率直で親切で明るい人が多かったので、嫌いではありませんでした。しかし、

米国政府のアフガン、イラク、そしてイスラエル政策には全く納得が行きません。理解出来るわけありません」

慎太郎は、ハーバード、エール、MITなどの大学に対する世界の評価が高いので、彼等が最高水準として米英を選ぶのは頷けた。しかし、そんな欧米志向で実際欧米に暮らし経験もある彼等が米国政府の外交政策に対して強く反発しているのは意外だった。

どうして、彼等は米国政府がイラクの独裁的政権を排除し民主化政策を進めようとしているとは考えないのだろうか。

しかし、慎太郎は、彼等に民主化ということをも到底理解されないといい、そのような質問は控えることにした。

また、そう言ったところで、彼等はサウジにはサウジの民主化、あるいは“沙漠の民主主義”があるなどと言うのではないかと慎太郎には思われた。

「一般的には、米国は、タリバンがテロリストを助けていたので、自由への戦争としてアフガンを空爆して、タリバンを追放し新たに民主国家が設立されるのを助けたと見られているけど、そのようには見ていないということですね。少し

説明して貰えませんか」

慎太郎は重ねて聞いてみた。

「僕は、あのアフガン空爆が自由への戦争とは解釈出来ません。タリバンは軍閥により混乱していた政治を改善して正当なイスラム国家建設を目的にしていたのです。タリバンを悪者視することには反対です。サウジ政府も、タリバン政権を正式な政府として認めていました。米国政府は一方的な解釈で空爆を実施して、多くの罪の無い人々を殺してしまったのです。このような行為は許されるものではありません」

一人の若者がそう応えた。

慎太郎が見回すと、皆、この発言に納得したように頷いていた。

慎太郎は、仕方なく話題を変えて聞いてみた。

「サウジは石油開発などで米国との結びつきが深いのではありませんか。これまで随分と米国には助けられて来たし、サウジも遠く米国へ原油や石油製品を輸出して米国のエネルギー安全保障に貢献して来ているではありませんか」

すると、手厳しい意見が次々と出された。

「米国政府は石油が欲しいだけですよ。本当にサウジのことを考えているのかどうか疑問です。それよりも、米国政府のイスラエル支援は露骨だし、パレスチナのことを考え、中東和平を真剣に進めようとしているか疑問ですね」

「僕も米国市民については悪い印象を持つてはいませんが、米議会に対するユダヤロビーの影響力の強さには懸念を持っています。ただ、米国は基本的にピューリタンですから、彼等こそ原理主義的、教条的で、その押し付けがましいところも我慢できませんね」

「そうそう、僕も同感です。彼等は自分達が選民で、民主主義を世界に広めたいとの勝手な正義感、使命感を持っているのではないのでしょうか。まあ、独善的なところがありますね」

アリはにこやかにそのやりとりを聞いていたが、頃合いを見計らい、トープのポケットから小さなガラスの瓶を取り出すと、それを慎太郎に見せた。透明な小さな円筒形の瓶には金色のキャップが付けられ、その中には琥珀色の液体が入っていた。

「慎太郎、これはタイプのバラから作った香水だ。付けてご覧」

と言って、金色のキャップを外し、栓をしていたプラスチックの蓋(ふた)を取った。そして、その蓋に付いているやはりプラスチックの棒に香水を付け、それを慎太郎の手と首筋に付けた。

プーンと芳香が周りに漂った。アリはバラの香りと言ったが、単なるバラの香りではないと思った。慎太郎は、その芳香に良い気持ちになり緊張感は急速に和らいでいった。

夢見心地の慎太郎の耳にアリの声が聞こえた。

「慎太郎、どうだね」

「素晴らしい香りです。まるで花園を歩いている夢を見ているようです。」

と慎太郎は、褒めるといふことが、それを下さいといふことになるアラブの習慣をすっかり忘れ、正直に伝えてしまった。

すると、アリは、

「気に入ったようだね。それでは、これを君に上げるよ」と気前良く言った。

「有難うございます。こんな素晴らしいものを貰えて嬉しいです」

慎太郎はアリにそう礼を言った。思いも寄らない、気に入ったプレゼントが貰えて慎太郎は嬉しかった。

タイプのバラか・・・と心の中で呟きながら、何度もその小さな瓶を見つめていた。アリはそんな慎太郎を微笑ましく見ていた。

これも全てスルタンのお蔭だった。

スルタンの行動には戸惑いもあったし、腹立たしい時もあったが、モスク内の討論でサウジの若者の考え方に触れることが出来たし、アリのよつな宗教界の権威とも知り合うこと

が出来た。大冒険だったが、思い切つてスルタンに付いて来て良かったと今はつくづく思っていた。

続けてアリは、ディナーに誘つてくれた。慎太郎は、数人の若者達に従つて、モスクを出て、近くの家に行った。大きな家だった。

最初に、三〇畳はあると思われる大きな広間でお茶とデザートをご馳走になりながら皆と話をした。今度は、政治の話など固い話はなくファイサリア・モールのことなどリヤドに関する話などを気軽に楽しく話した。

若者達の中にはイマームの弟がいて将来はやはりイマームになりたいと言っていた。彼は、まだ一〇代のように見えたが、既にコーランを全部覚えているとのことだった。

彼は、皆からせがまれて慎太郎にその一節を聞かせることとなった。

彼がコーランの朗誦を始めると、皆、シーンとして聞いていた。

澄んだ美しい声が広間に響き渡った。

「ビスミツラー・ヒツラフマー・ニツラヒイイーム(慈悲あまねく慈悲深きアツラーの御名において)」

「アルハムドリツラー・ヒラツ・ビル・アーラミイイーン

(万有の主アツラーにこそ凡ての称賛あれ)」

.....

やがて、食事の支度が整い、慎太郎は、お茶を飲んだ部屋と同じくらい広い部屋に通された。

絨毯の敷き詰められた床に丸いテーブルが置かれ、その上には花柄の白いテーブルクロスが敷かれていた。

テーブルの上には、サムブーサというアラブ風揚げ餃子、ホンモスという豆を潰し練ったもの、カプサという羊の肉の入ったサウジ伝統の炊き込み御飯、それにふんだんな果物などがところ狭しと並べられていた。

サウジの食堂には洋式のダイニングテーブルは置かれていない。皆、直接床に座って食べている。料理を取るには右手を使う。慎太郎用にナイフとフォークが用意されていたが、皆は上手に手で食べていた。慎太郎も手で食べてみようとし

だが、脂の濃い羊の肉やカプサを摘むのは思ったより難しかった。若者達は、慎太郎のぎこちない仕草を見て笑っていた。

ふと、気が付くと、スルタンは、離れた場所から、あのキラキラとした眼差しで、終始、にこやかに慎太郎の方を見守っていた。そして、時折、アラブ式の食べ方、料理などを説明してくれた。日本では大変行儀の悪い食べ方だが、片膝を立てて座っているものが居た。慎太郎がそれを不思議な顔で見えたりすると、スルタンが、こつすると食べ過ぎを防ぐことが出来るなどと笑いながら説明してくれた。

慎太郎がスルタンの車で無事レジデンスに戻った時には既に一二時を回っていた。

レセプションには、まだ、ファハドがいた。ファハドが、慎太郎に、さっき一緒に出かけて行ったのは、誰かと真剣な眼差しで聞いたので、慎太郎はスルタンという名前しかしかなかったもので、名前だけ言ってみた。ファハドは、偉いイマームかウラマー（知識人・法学者）あるいはシェイク（族長）ではないかと慎太郎に聞いてきた。慎太郎は、正直に

スルタンの身分は分からないが、先ほどスルタンの紹介でシ  
エイク・アリ・ムトラックという人と会ったとファハドに言  
った。すると、ファハドは、驚いて、目を大きく開いて、シ  
エイク・ムトラックはテレビに良く出る著名なイマームだと  
慎太郎に教えてくれた。

ファハドは、既に、アブダラーから慎太郎が外交官と会っ  
ていたことを聞いていて、慎太郎が、彼等からすれば雲の上  
の人々と次々と会っていることで、日頃のひょうきんな慎太  
郎のイメージとの落差に戸惑いを感じつつ、いつしか慎太郎  
の前で緊張するようになっていた。

慎太郎は、レセプションのデスクの上に、空になっている  
リング用のガラス容器を見つけ、その周囲をいつもの通り覗  
いて見せた。それを見て、ファハドは、

「サー、生憎、今日はリングが無くなってしまいました」  
とまだ幾分緊張しながら言った。

慎太郎は、おどけながら、そのガラス容器を持ち上げた。  
すると、そのガラス容器が置いてあったところには、ガラス  
容器を固定するための小さな穴が空いていた。慎太郎が、そ

の穴をふざけて覗き込み、おどけて見せると、緊張していた  
ファハドは、ようやく、いつものひょうきんな慎太郎を見つ  
け、笑いながら言った。

「ミスター・イケナミ、その中には何もはいていませんよ」

そこで、慎太郎は、ガラス容器をテーブルに戻し、

「ファハド、おやすみ」

と言うと、まだ、笑っているファハドを後に、自分の部屋へ  
と向かった。